

千寿院のなかまたち

キーちゃんの大冒険



たかつき動物園

千寿院

【キーちゃんの大冒険】

第1章 カギしっぽのキーちゃん

黒ネコのキーちゃんは、お寺の一角に住んでいる。
しっぽの先がくるんと曲がったカギしっぽ。
元気いっぱい、蝶々を追いかけたり、
他のネコのご飯まで食べちゃうちょっとワルイ子……
だけど、どこか憎めない、明るい女の子だ。
そして、
自分のことを「ボク」と呼ぶ現代っ子でもある。

毎日お寺で世話をしてくれるお姉ちゃんがいて、
キーちゃんは今日ものびのびと暮らしている。

そんなキーちゃんには、
仲良しの三毛猫・パンダちゃんがいる。
ふわふわの毛と、やさしい目をしたお姉さんネコ。
キーちゃんが他の子のご飯を食べに来ても、
怒らずにペロペロなめてくれる。
まるでお姫さまのような心の広さで、
みんなから“パンダ姫”と呼ばれている。

ある日のこと。
キーちゃんは、お寺の奥にある小さな祠に入りこんだ。

そこには静かにただよう、動物たちの靈の気配。

「にゅ……なんか、ちょっとフシギな場所にゅ」

でも、そこにいた靈たちはこのお寺で供養された、かつて人と暮らしていた優しい動物たちだったのだ。

その中のひとり、白く光る犬の靈が、キーちゃんに話しかける。

「すまんが……ひとつ、頼んでもええか？」

それは「タロー」と名乗る犬の靈。彼は毎日お参りに来ていた、年老いた飼い主、おじいちゃんの姿を見かけなくなつたことを、心から心配していた。

「なにか、あつたんやろか……元氣ならええけど……」

タローの言葉に、キーちゃんはまっすぐうなずく。

「まかせるにゅつ！ ボク、行ってくるにゅ！」

キーちゃんは、お寺の外に出て、聞き込み捜査を始める。

野良ネコたちはそつけなかつたけど、
中には人に助けられた猫もいて、
あたたかい話に耳を傾ける。

そして、ひとりの子鳥との出会いが、物語を動かす。

「タロー？ ああ、それおじいちゃんちの犬だよ。
最近ね、おじいちゃん歩けなくて寝てるんだって、
ママが言ってた！」

「あ、あるけないの！？」

戸惑うキーちゃん。

そこへ、パンダ姫がそっと現れて言う。

「おじいちゃん、ケガしてるのかな？」

「にゃにゃっ！？ それなら急がないと！！」

おじいちゃんの家に向かうふたり。
門の奥には、縁側で足を包帯で巻いたおじいちゃんが
ひとり、しづかにタローのことを思い出していた。

「……タロー。心配させてるかな……
すまんのう、ちょっと転げてしまってな……」

おじいちゃんのケガは軽い捻挫のようで、
キーちゃんとパンダちゃんは胸をなでおろす。

でも、まだタローの想いは届いていない。

そのとき——

キーちゃんはタローの言葉を思い出した

「……ひとつ、頼みがある。

おじいちゃんが、もし元気をなくしていたなら、

わしがいつも使ってた赤い首輪。

名前のタグがついとる。

祠の裏の木の根っこに隠してあるんや。

それを、

おじいちゃんのそばに……届けてくれんか？」

キーちゃん、うなずいてダッシュ！！

急いでお寺に戻って、祠の裏の土を掘ると、

そこには少しくすんだ赤い首輪が。

「にゃふっ！ あつたにゃ～～っ！！」

そしてその夜、

キーちゃんはこっそり、

おじいちゃんの家の玄関にその首輪を置いた。

朝。

ドアを開けたおじいちゃんが、首輪を見つけて驚いた。

「……これは……タローの……首輪……！？
なぜ今ここに……？」

手に取ると、土の香りと草のにおいがかすかにして、
何よりタローと過ごした日々が心にふわりと
よみがえる。

「……お前、やっぱり……来てくれてたんやな……」

そう言って、おじいちゃんは笑った。

「足、治ったら……すぐに会いに行くからな……」

お寺の屋根の上。
キーちゃんはカギしっぽをくるんと巻いて、
のびをしていた。

「にゃ～～、がんばったにゃ～～～！！」

パンダ姫がそっと微笑んで言う。

「とってもよくやったわ。きっと、タローも喜んでる」

キーちゃんはうれしそうにゴロゴロ喉を鳴らしながら、空を見上げた。

そのしっぽの先には——
まだまだたくさんの“こころ”が
巻きついているかもしれない。
でもそれは、また別の日のお話。
今日もキーちゃんは元気に蝶々を追いかけている。



第2章 カギしっぽと秘密の祠

* 秘密を知る夜 *

タローの想いをおじいちゃんに届け、
数日たったある夜、
キーちゃんとパンダ姫は、もう一度、
あの祠を訪れることにした。
風は静かで、葉っぱのざわめきも優しい。

「ふたりとも……来てくれたんやな」
犬の靈・タローがやさしく笑っていた。

その後ろには、かつて飼われていた犬、猫、ウサギ、
小鳥、モルモット……
お寺で供養された靈たちが静かに集まっていた。

その中から一匹の猫の靈が前へ出てきて言った。

「キーちゃん。あんた、ええ子やなあ。
わしら、あんたの行動、ちゃんと見とったで」

「にやふん！？ そんな……ボク、
たいしたことしてないにや！」

「いや……その心がええんや」

靈たちが輪になり、足元にふわりと光の模様を描く。

「これは、“力ギしっぽの子”だけが知る特別な秘密や。
それはな……“心のつながり”を見る力のことや」

キーちゃんのしっぽがふわりと光る。

「その力ギしっぽで、
迷った“こころ”的アを開けられる。
あんたは、“開く者(ひらくもの)”なんやで」

「にやつ……！？ ボクが……ひらく……？」

「そうや。目には見えんけど、確かにある“心の戸”。
人間も動物も、ときどきそれを閉じてしまう。
でもあんたの元気とやさしさは、
閉じた戸をちょいと開けるんや」

パンダ姫が静かにキーちゃんを見つめる。

「……きっと、あなたにしかできないことが、
これからも待ってるのね」

キーちゃんはしっぽをくるんと丸めた。

「にやふつ……そしたら、もっと冒険しないとにゃ！」

靈たちは微笑みながら消えていく。
タローが最後に、
ほんの少しだけ頭を下げた。

「ありがとうな、カギしっぽの子。
そして、そばにいてくれた、パンダ姫。
——また、いつかどこかで」

夜の祠を出るころ、空に流れ星がひとすじ。

キーちゃんはしっぽをクルンと回して、
「にやつふ～～～ん！！」と叫んだ。

その声は、今夜だけ、空のどこまでも響いていた。



第3章 雨の夜に生まれた心

キーちゃんのおいたち

キーちゃんは、野良猫の赤ちゃんだった。
小さな体に、大きな世界。

けれどその世界は、ある雨の夜を境に変わった。
大好きだったお母さんが、
車に轢かれて命を落としたのだ。
運転していたのは人間だった。

その日から、キーちゃんの心には
「信じられない」という気持ちが巣くった。
人間が近づけば「シャー！」と鋭い声と
恐ろしい顔で威嚇した。
誰にも頼らず、食べ物を探して、
夜の町をひとりふらふらと歩いていた。

そんなある日。
優しい目をしたお姉さんと出会った。
お姉さんは、
キーちゃんがどれだけ「シャー！」しても、
決して怒らなかった。
ただ、静かに距離をとって、ごはんを置いてくれた。

キーちゃんの中で、何かが揺れはじめる。

「人間って、ほんとうにみんな悪いの？」
でも答えは出ない。
近づいて、また傷つるのが怖い。
だからキーちゃんは、いつもあと一歩、
踏み出せなかった。

そんなある夜。
また雨が降った。
雷も鳴った。
キーちゃんは、あの夜を思い出して泣いた。

そのときだった。
——優しい声が、心の奥に届いた。

「キーちゃん」
「人を恨んでも、お母さんは戻ってこない」
「憎しみは、あなたの心を幸せにしないよ」
「あなたには、笑って生きてほしい。生きて、
世界の光を見てほしい」

それは、まるで夢の中のようだった。
けれど、はっきりと感じた。
それはお母さんのあたたかさだった。

朝になった。
雨は止んでいた。
お寺のお姉さんが、いつものようにやってきた。

少し離れた場所で、静かにご飯を置く。

……そのとき。

キーちゃんは、自分の小さな足で、一步を踏み出した。
迷いながら、でもまっすぐに。
お姉さんの膝元へ歩いていき、すりすりと体を寄せた。

お姉さんは、目に涙をためて言った。

「もう、ひとりじゃないよ」
「ここにはみんないるからね」

そのとき、キーちゃんは初めて
「ゴロゴロ」と喉を鳴らした。
それは、温かさと安心を知った音だった。

——こうして、力ギしっぽの子の物語ははじまった。



第4章 力ギしっぽのちから

お寺の境内。

風鈴がからん、ころんと鳴る静かな午後。

ひとりの子どもが、

ゆっくりと足を引きずりながら歩いていた。

生まれつき片足がまっすぐで動かない。

走れない。跳べない。

だから、子どもは友だちをつらなかつた。

「友だちなんて、いらない」

「どうせみんな、僕を笑うんだ」

心に、かぎをかけた。

誰にも近づかない。

親にも、本当の気持ちを言わない。

夜。

お母さんが自分のことで泣いているのを見ても、

「ごめんなさい...」と心の中で

つぶやくことしかできなかつた。

そのときだつた。

境内の隅から、小さな黒ネコがひよいと現れた。

それが——
くるりと曲がったしっぽをもつ、
キーちゃんとの出会い。

子どもは警戒した。
キーちゃんが近づくと、少し距離を取った。

でも、キーちゃんは逃げない。
何も言わず、ただ近くにいる。
蝶々を追いかけたり、日向ぼっこをしたり、
気がつけば、いつもそばにいる。

やがて、子どもはぽつりとつぶやいた。

「なんで……逃げないの？」

キーちゃんは、しっぽをくるりと見せてすり寄った。

キーちゃんのしっぽは、カギのかたち。
まっすぐじゃない。
でも、それは誰かの心をそっと開ける魔法のカギ。

一方で、子どもも足はまっすぐで動かせない。
人と“ちがう”自分。

そのことにずっと傷ついて、

誰にも見せられない“痛み”を抱えていた。

でも、キーちゃんと過ごすうちに、
少しずつ気づいていく。

——まっすぐのままは、わるいことじゃない。
それは、誰にも似ていないじぶんだけの形。
力ギしっぽも、まっすぐのままの足も、
生きていくのに「いらないもの」なんかじゃない。

そこには、その人にしかない強さと、やさしさがある。

そして——
心のあたたかさは、みんな平等や。

子どもは初めて、泣いた。
涙がこぼれるのに、心があたたかかった。

「……ありがとう、キーちゃん」

その日、子どもの中で、ずっと閉ざしていた扉が
「カチャリ」と音を立てて開いた。

キーちゃんのしっぽは、
くるりと揺れている。

それはまるで、こう語りかけるように——

「だいじょうぶ。

そのままで、ほんまにじゅうぶんなんやで。」



第5章 和尚と心のソーシャルディスタンス

キーちゃんがこのお寺で暮らすようになって
しばらくたったある日、
不思議なことが起きた。

「キーちゃん、もうお寺の生活には慣れたかい？」

……えっ？ しゃ、喋った！ ？
いや、ちがう。このおじさん……
キーちゃんの考えが聞こえる！ ？
なにこれ、キモイ！！！

キーちゃんがビビってると、
そばにいたパンダ姫がそつと言った。

「和尚さまはね、動物とお話ができる人なの。
でも、それは秘密なのよ。
和尚さまも誰にも言わない。
だから、安心してお話ししていいの」

何が何だかわからないまま、キーちゃんはおそるおそる和尚に答えた。

「……はい、お寺の生活には、もう慣れました……
けれど本当は、ミケ姉さんに叱られてばかりで、
しおちゅうネコパンチをくらって悩んでいます。」

和尚はそれを聞いて、クスッと笑った。

「キーちゃんよ、人間界も同じなんじゃよ。
『合う、合わない』『好き、嫌い』
——みんな悩んどるんじゃ。

同じ職場や、同じ環境の中で生活せにゃならん時、
とてもつらいもんじゃ。

じゃがな、キーちゃん。

お前も最初、このお寺のお姉さんに
なかなか近づけなかつたじゃろ？」

キーちゃんはハツとした。

和尚はゆっくりと続けた。

「お互には『心』というものがある。
立場も、考え方もある。
そこへいきなり、自分の都合でグッと詰め寄つたら、
かえって反発されるだけじゃ。

それぞれの『心』が、その距離として現れている。

だからこそ——

心にも距離感が必要なんじゃよ。

それには『時間』が必要なんじゃ。

わしはそれを——

『心のソーシャルディスタンス』と呼んでおる」

和尚はニコニコして続けた。

「焦ることはない。

ゆっくりでえんじやよ、キーちゃん」

「初めっからちゃんと出来上がった関係なんて無い

相手を理解しようとする心がお互いを繋げるんじゃ」

そして、少し目を細めながら言った。

「それよりも、パンダ姫とはとても仲良しじゃな？

よいではないか、キーちゃん。

パンダ姫から、いろんなことを学ぶがよい。

もしかしたら、

ミケの心もわかってくるかもしれないぞ」

キーちゃんは思わず照れて、目をそらす。

和尚は少し間をおいて、やさしく尋ねた。

「キーちゃん。
何か、ほかに話したいことはあるかい？」

キーちゃんは、長い間しまっていた思いを、やっと口にした。

「和尚さま……『運命』ってあるんですか……？」

あの雨の夜のこと、お母さんのこと——。

和尚はそっとキーちゃんの頭をなでながら、静かに話し始めた。

「キーちゃんよ。
もしこの世界のすべてが
『運命』で動いているとしたら、
人はなぜ『悩み』『苦しみ』『嘆く』のか？

もしすべてが決められたことなら、
キーちゃんも、わしも、
何のためにこの世にいるんじゃろう？

仏教ではの、『縁起』という考え方がある。
それは、すべての出来事や存在は、
いろんな原因と条件——

つまり『縁』によって成り立つておる、
ということじゃ。

お母さんの事故も、雨、夜、道路、車、人、ご飯……
それらすべてが重なって起こったことじゃ。

じゃがな、キーちゃん。
その悲しみの中で『なぜ』『どうして』を
何度も問い合わせ続けると、心はますます苦しくなる。

そんなとき、『運命』という言葉は、
一つの『救い』になることもある。

だから。
わしの答えは——
『運命は無いとも、有るとも言えぬ』じゃ。

キーちゃん。
お前はその苦しみの中で悩んで、考えて、
ここまで生きてきた。
わしは、そんなキーちゃんが大好きじゃ。

きっとお前は、
いつか誰かの悩みや苦しみ——

その『心のカギ』を開ける存在になると、
わしは信じておるぞ」

優しい夕日が和尚とキーちゃんを
そっと照らし出していた。



第6章 キーちゃんのお寺

キーちゃんの一日は、
本堂から聞こえる「ポクポク」という
木魚の音とともに始まる。
和尚さんが朝のお経を唱える、何とも清々しい朝だ。

大きく背伸びをしたあと、
お寺の猫たちはゆっくりと朝食をはじめる。
もちろん、そこにはもう一人——お寺の主、
ゆめ殿もいる。
たった一匹のワンちゃんで、御年うん十歳の女王さま。
その風格たるや、猫たちも一目置いている存在。
ゆめ殿については、また今度たっぷり話そう。

さて、まずは何より朝ごはん。
お姉さんが作るごはんは、香りからして元気が出る。

ちなみに、
和尚さんが動物と話せることはお寺の秘密で、
お姉さんもそのことは知らない。

ごはんを食べ終えたキーちゃんは、
和尚さんのところへ向かう。

「和尚が唱えてるお経はなに？」

「観音さまのお経と般若心経だよ。」

意味はわからなくても、
その響きがキーちゃんの心を落ち着かせる。

「このお寺には人は眠ってないの？」

「ペットだけだよ。」

「なぜペットだけなの？」

「キーちゃんが病気になつたら動物病院へ行くよね？
それは人間とは別の病院だ。
それと同じで、動物を供養するお寺も、
動物を心から愛する場所でなきゃいけないんだよ。」

「和尚は秘密の祠、知ってるの？」

「当たり前だよ。
いつもあの前でお経を唱えてるじゃろ。
あそこには、いろいろな人生を歩んだペットたちが
幸せに暮らしておる。
キーちゃんとタローのこと、
ちゃんとタローから聞いとる。
この間、おじいさんが
『不思議なことがあるもんやなあ』
と首をひねって話してたよ。」

もちろん真実は言わないうが、
おじいさんはタローがそばに居てくれるって、
泣いて喜んでた。キーちゃん、よう頑張ったな。」

嬉しくてたまらなくなつたキーちゃんは、
思わず和尚に飛び乗ってしまった。

「このお寺の子になって、ほんとうによかった。」

「まさに縁じやな。
しっかり自分の役目を果たすんじやよ。」

このお寺に眠る子たちは、みんな人を愛し、
感謝している。
人と共に、いや、お互いに
「愛」「感謝」「喜び」「幸せ」を分け合いながら、
その魂を磨いてきたのだ。

まだまだ話は尽きないけれど――

そこへKINGじいさんが現れた。
「いつまで話しとるんや、ちゃんと仕事せんかい。」

KINGじいさんは猫の中の猫、「皇帝」だ。
気に入らなければ
和尚にでもおしっこをかけるという強者。
和尚もあわてて木魚を打ち直し、お経を唱え直した。

その「ポクポク」という音は、
お寺の隅々まで響いていた。



第7章 鏡の回廊と修羅の心

ある日のこと。お寺の奥に並ぶ、
六躰のお地蔵さまの前で、
キーちゃんは
しっぽをくるんとさせながら首をかしげた。

「どうして、六人も並んでるのかにゃ？」

その声に応えるように、そっと風が吹いた。

「それはね、キーちゃん」と、
ひとりのお地蔵さまがやさしく話しかじめた。

「私たちは“六地蔵”といって、
仏教における六つの世界——
六道(ろくどう)で迷い、苦しむ心を救うために、
それぞれの場所に立っているのですよ」

地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道——
それは、誰の心にもある「迷いと苦しみの世界」。

そのとき、お地蔵さまがやさしく言った。

「キーちゃん、
もしよければ“修羅の世界”を見に行ってみるかい？」

「にゃ？ 修羅……？」

気がつくと、
キーちゃんの目の前に鏡の回廊が広がっていた。
どこまでも続く鏡。歩けば歩くほど、
自分の姿が映りこむ。

「にゃ……ここ、どこにゃ……？」

すると、鏡の中から声がした。

「どうせ自分なんか……」「となりの子は足が速いし、
あの子は絵がうまい……」
「自分は、何をやっても中途半端……」

その声の主は、ひとりの女の子。鏡に映るのは、
いつも誰かと比べてしまい、
自分にダメ出しばかりする姿だった。

そこは“修羅の世界”。
競い争いが絶え間なく続く世界。
比べて、比べて、比べられて。
自分の価値を他人との違いで決めてしまう
苦しみの世界だった。

鏡の奥に「心のカギ」が見える。でもその前に、
巨大な鏡が立ちはだかっている。

それは、自分自身への怒り、悔しさ、羨ましさ、そして軽蔑——そんな感情がこびりついた姿。

キーちゃんは、そっとその前に座った。
そして、くるんとしたカギしっぽで、
鏡を軽くコン、と叩いた。

「その顔、ほんとにキミの顔かにゃ？」

「……でも、自分は、何もできない……」
「特別な子に、なれない……」

「でもにゃ。ボクには、比べちゃう気持ち、
すごくよく分かるにゃ。
でも、鏡ばっかり見てたら、
自分の足元に咲いてる花も見えないにゃ」

その瞬間、鏡の下に、小さな一輪の花が咲いた。

女の子ははっとする。
その花は、ずっと自分のすぐそばにあったのだ。
ただ、自分で見ようとしていなかっただけだった。

「他の誰かにならなくていいにゃ。キミだけの道、
キミだけの花があるにゃ」

カギしっぽがふわりと光る。大きな鏡が音もなく溶け、あたたかな光が差しこむ。

心のカギがカチャリ、
と小さく音を立てて回った。

キーちゃんはそっと女の子に体をすりすりした。
そして、風がまたそっと吹いた――

――気づけば、
キーちゃんはお地蔵さまの前で眠っていた。

「夢……じゃないにや」

そのとき、お地蔵さまの声が聞こえた。

「目が覚めたかい、キーちゃん」

やさしく、落ち着いた声だった。

「六道の世界——それはすべて、
心の中の姿でもあるんだよ。
心にある迷いや苦しみが、それぞれの道をつくる。
そして、私たちはそこから“光”へと導くのが
仕事なんだ」

「修羅の世界で出会った子は、キーちゃんの
心の一部でもあったんだよ。」

でも、よく帰ってきたね。偉かったね」

「心の中には、地獄も光もある。
だからこそ、
誰かが“光”に気づくお手伝いをすることが、
とても大切なんだ」

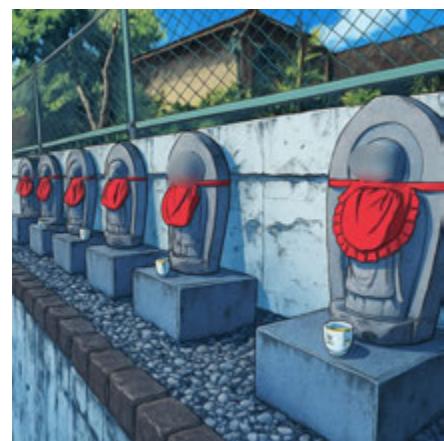
お地蔵さまは、やさしくほほえんだ。

「キーちゃん、あなたも、
これからも色んな人の“光”になってあげてね」

キーちゃんは、しっぽをくるんと丸めて、
元気にうなずいた。

「にゃふっ！ わかったにゃ！」

——今日も、カギしっぽは、あたたかく光っていた。



第8章 阿弥陀如来とキーちゃん

ある日、お寺が急にバタバタと慌ただしくなった。

キーちゃんが目を丸くして見守る中、
ひとつの家族がやって来た。

お母さんが、白い布に包まれた小さなウサギちゃんを
そっと抱いている。

お父さん、男の子、女の子——みんなの目が涙で
にじんでいる。

今日は、ウサギちゃんのお葬式。

お寺の本堂には静けさが流れ、
和尚がお経を唱える声が響く。

キーちゃんも、家族と同じように手を合わせて、
ウサギちゃんの冥福を祈った。

やがて、お焼香の時間になる。

家族が一人ひとり、煙をくゆらせ、
静かに手を合わせたその時——

ふわり。

その香煙に導かれるように、ひとすじの光が差し込む。

その中から、穏やかで柔らかな光を放つ存在が現れた。

「……にや？ あの人は……誰にや？」

そっと問いかけたキーちゃんに、
そばにいたお地蔵さまがやさしく答える。

「あれは、阿弥陀如来さま。極楽浄土の仏さまだよ」

「極楽……？ 浄土……？」

お地蔵さまはゆっくりと話し始めた。

「阿弥陀如来さまは、
無限の寿命と光を持つ、やさしさの仏さま。
生きとし生けるものすべてを救いたいと、
四十八の願いを立てられた。

その中でも、
『南無阿弥陀仏』と唱えるものを、
極楽へ導くと誓われた。
そして、大切な命が終わるとき、
阿弥陀さまはその魂を迎えてくださる。

そのことを『来迎(らいごう)』と言うのだよ」

やがて、ウサギちゃんの小さな魂が、
光に包まれて浮かび上がる。

その傍らに阿弥陀さまがそっと寄り添い、
ゆっくりと空の彼方へ向かわれる。

その姿は、とてもやさしく、美しかった。

キーちゃんの胸に、ぽっかりと何かが広がる。

——だから、お別れって、悲しいだけじゃないんだ。

キーちゃんは、
どうしても聞きたくなって、阿弥陀さまに声をかけた。

「ボクのお母さんも……
阿弥陀さまに迎えに来てもらえたの？
お母さんは……ちゃんと天に、居るの？」

阿弥陀如来は、静かにキーちゃんを見つめた。

その視線には、すべてを包むあたたかさがあった。

すると、その隣にいたウサギちゃんが、
にっこりと笑って言った。

「大丈夫だよ、キーちゃん。
ボクが阿弥陀さまのそばで、
ちゃんとキーちゃんのお母さんを見つけるよ。
それには、ボク、決めたんだ。
これからは空の上で、
キーちゃんの“元気”も“活躍”も“成長”も、
ぜんぶ“キーちゃんの大冒険”として
みんなに話してあげるんだ！」

キーちゃんのしっぽが、
ふわりとゆれて光った。

阿弥陀さまは、やさしく微笑み、
天の彼方へと昇っていかれた。

空にはひとすじ、光の帯が残っていた。

それはまるで、
旅立った命が、
いつまでも見守っているという証のようだった。

キーちゃんはそっと空に手を合わせた。

そして、心の奥で、こうつぶやいた。
「ありがとうにゅ……ボク、がんばるにゅ」



第9章 キーちゃんと大日如来さま

ある日、和尚さんが外出しているあいだ、
キーちゃんはそっと本堂に入ってみた。

そこには、堂々たるお姿の仏さまがいらっしゃった。
静かにたたずむその仏さまの前で、
キーちゃんは思わずつぶやいた。

「すごく立派な仏さまにゃ……誰なんだろう？」

そのとき、
ふわりとした毛並みのパンダ姫が背後からやってきた。

「その方はね、大日如来さまよ」と、
やさしく教えてくれた。

大日如来さまは、宇宙そのものの真理を表す仏さま。
すべての命、すべての光、
すべての時間と空間を内に宿す、宇宙の教主。

「そんなにすごいお方だったにゃ……」
キーちゃんが感心して見つめていると——

ふいに、カギしっぽがふわりと光った。

その瞬間、

堂内に響くような穏やかで気品ある声が聞こえてきた。

「キーちゃん、ごきげんよう」

「だ、大日如来さま……！？」

キーちゃんはドキリとして、思わず背筋を伸ばす。

「どうした？ 何か知りたいことがあるのかい？」

言い出しづらそうなキーちゃんに代わって、
パンダ姫がそっと口をひらく。

「キーちゃん……お母さんことを知りたいんです」

その言葉に、大日如来さまは静かにうなずかれた。

「そうか……キーちゃん。お母さんに、
もう一度逢いたいんだね」

「うん……」

キーちゃんの声は、涙でかすれていた。

「では逢わせてあげよう」

「ほんとに！？ 逢えるの！？」
ぱっと目を見開くキーちゃん。

大日如来さまは、ゆったりと語りはじめた。

「私は宇宙であり、宇宙はキーちゃんの中にもある。
宇宙は比べるものではなく、測れるものでもない。
ただ、そこに在り、すべてを包みこむもの。
その宇宙に、君のお母さんは今も生きているんだよ」

「えっ……じゃあ、
すごく遠いところに行っちゃったってこと？」

「そう思うかもしれない。けれど、キーちゃん。
大切なのは外にある宇宙ではない。
君の中にも、同じ宇宙がある。
心のなかで、思い出すんだ。
お母さんのしぐさ、声、ぬくもり、香り、
そして笑顔を——」

その瞬間——

キーちゃんの胸の奥が、ふわりとあたたかくなった。

「お母さんの声……香り……笑ってる……！
お母さん！！！」

やさしい風が吹き抜けたかと思うと、
そこには確かに、お母さんネコが立っていた。

「キーちゃん、大きくなったね。お母さん、嬉しいよ。
こっちおいで、抱っこさせて」

キーちゃんはお母さんの胸に飛び込み、
何度も何度も言った。

「お母さん……逢いたかったよ。
ずっと逢いたかったんだよ……！」

お母さんは微笑みながら、
キーちゃんの頭をやさしくなでてくれた。

「バカだね、キーちゃん。
お母さんはいつもそばにいたよ。
あなたが頑張ってるの、ちゃんと見てたよ」

その光景を見ていたパンダ姫も、
そっと涙をぬぐいながら言った。

「キーちゃん……よかったです。
ほんとに、逢えたんだね……」

そして大日如来さまが、やさしく語りかけた。

「キーちゃん。

この再会を叶えたのは、私の力ではない。

お母さんを思う、君の“心”が扉を開いたんだよ。

その心こそ、宇宙とひとつにつながる力なんだ」

キーちゃんは、

胸に広がる光とあたたかさを抱きしめながら、

ゆっくりと目を閉じた。

——こうして、

キーちゃんは宇宙の教えに触れたのだった。



最終章 お寺の仲間たち

朝。

お寺には、今日もやさしい陽ざしと
「ポクポク」という木魚の音が響いている。

「ごはんだよ～」

お姉さんの声に、猫たちは次々に集まつてくる。

キーちゃんはお腹を鳴らしながら飛びついで、
そのすぐそばではパンダ姫が自分のごはんを少し、
そつとキーちゃんに分けてあげている。

「ねえ、キーちゃん」

パンダ姫がやさしく話しかけた。

「毎日って、何気なく過ぎていくけど……
その中に、たくさんの“しあわせ”がかくれてるんだよ。
だから、それを見落とさないでね。
見つけたら、みんなにも分けてあげようね」

キーちゃんは「にゃつふ～ん♪」と
お腹をいっぱいにしながら、
ふと、カギしっぽがきらりと光るのを感じた。

やがて、ゆめ殿がゆっくりとみんなの前に現れた。

「さあ、今日も元気にご挨拶の時間よ！
お参りに来られる人たちに、
笑顔でごあいさつを忘れずにね」

「は～い！！」
みんなが元気に返事をする中――

KINGじい様だけは、ひとりソファで丸くなっていた。

「ワシは寝とくんや……
ご挨拶はお前らがやつときい……」

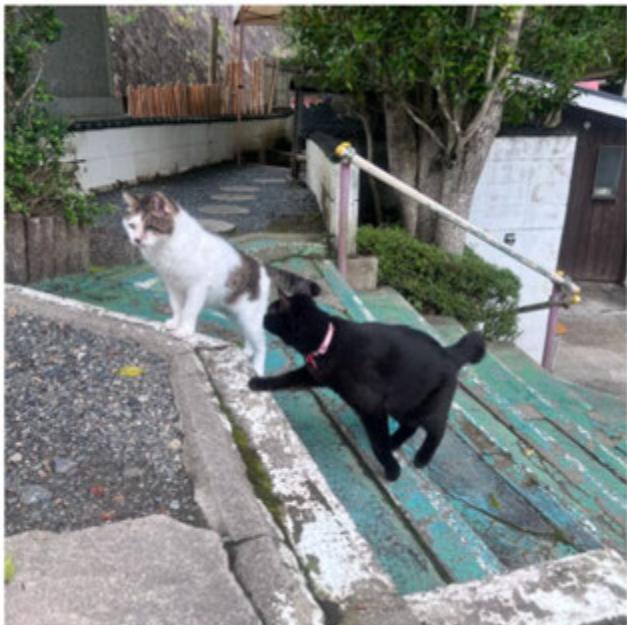
――そんな調子も、いつものお寺の日常。

今日も、やさしい風がそよぐ。
人と動物がともに心を寄せ合い、
“光”を見つけ、“しあわせ”を分け合う場所。

カギしっぽのキーちゃんは、今日も元気いっぱい。

しっぽの先に――
またひとつ、
誰かの心の鍵をひらくための光を、宿していた。

————おしまい————



千寿院の仲間たち



キーちゃんの大冒険

「番外編 KING物語」

それは、まだキーちゃんがお寺の子供になる
ずーと前の物語、
KINGが産声をあげたその日から始まる物語

KINGは5人兄弟でこの世に誕生した。
だけどKINGだけは生まれた時から片目が
潰れていて無かった。
そして、背骨も他の兄弟と比べ明らかに曲がっていた。

そんなKINGは、他の兄弟から仲間外れにされていた。
おかあさんのミルクも、
KINGだけは飲むことが出来なかつた。
そんなKINGの身体は日に日に痩せ衰えていった。

ある日、KINGの母親はKINGだけを咥え、
お寺の片隅にそっと
KINGを置き去りにした。
その行為はまるで育児放棄の様にも見受けられた。

まだ赤ちゃんのKINGを見つけたお寺のお姉さんは
躊躇することなく、KINGを抱き上げた。
お姉さんは直ぐに近くの病院に駆け込み、
先生にKINGをみてもらつた。
でも診断結果は最悪なものだつた。

お姉さんは自分の家にKINGを連れて帰り、何度も何度もミルクを飲まそうとしたけれどKINGは飲もうとはしなかった。

KINGは心の中で思っていた。
「自分は片目でしかも身体も歪み、
生きている価値などない」
「ミルク飲んでも長生きも出来ないし、
生きていても苦しいだけ」
「ウザい」「ほっといてくれ」

でもお姉さんは何度も何度も口にミルクを近づける。

「KING、寒くない？」「タオル気持ちいい？」
「お願い、ミルク飲んで、おいしいよ」「元気になるよ」

KINGには生きる気力がもう無かった。

もうどれくらい時間が過ぎたのだろうか？
長く静かでそして重い時間が過ぎた。

お姉さんは優しくKINGの身体を撫でながら、KINGに話しかけた
「KING、お願いミルク飲んで、お願い死んだらダメよ」
「どうして飲んでくれないの？」
「死ぬつもりなの？生きたくないの？」

「ダメだよせっかくこの世に生まれたのに、
こうして2人会えたのに」

KINGには聞こえてはいたが、
KINGの身体はそれに答える様子は無かった。

更にお姉さんはKINGに語りかけた。
「KING、もしあなたが『死』を選ぼうとしているなら、
私はあなたに何もしてあげられない。」
「今の私にできることは、
私のこの手の中であなたを看取ることぐらい」
「でもね、忘れないで、
あなたは間違い無くこの世に生まれ
この世に存在したのよ」
「私はKINGのこと絶対に忘れないよ」
「だからKING、あなたも忘れないで私のこと、
この手の温もり、この時を間違いなく生きたこと」

「KING！『命』って凄いもんなんだよ」

KINGの小さながらだに、お姉さんの涙が、
何度も何度も雨だれの様に流れ落ちた。

KINGの心の奥の方で、「何か」が弾けた！
「死」だけが支配していた心の中で、
「何か」が騒ぎ出した。

からだの中をその「何か」が走り回っている。

血の流れを感じる、
その「何か」がKINGの心を呼び醒ます。

KINGはお姉さんの差し出すミルクを口に含んだ。
ガーゼに染み込んだミルクの味、ただ無性に飲み込んだ。

やがてミルクはスポイドからとなり、
数日が過ぎた頃はお皿から飲んでいた。

十年ぐらいがあつと言う間に過ぎ去り
KINGはいつもの様にお寺の観音さまの前でお昼寝中
KINGはお寺の一員として暮らしている。

お寺の観音さまは共同墓地の中に居られ、
参拝に来られる方ひとりひとりにご挨拶をされている。

参拝者が途切れ、
穏やかな日差しがKINGを包みこんでいた時。
ひとりの年老いた猫がKINGに近づき話しかけてきた。

「お兄さん、こんにちは」
「ちょっと観音さまにご挨拶に来たんだよ」

KINGはオバアさん猫を見ながら、
「ああそうですか、ゆっくりお参り下さい」
とだけ言った。

老婆猫はそんなKINGに更に話しかけた。
「私はね、どうしてもこの観音さまに
挨拶したかったのさ」
「お兄さん、あなたのお母さんは元気なのかい？」

「オレの母親はこのお寺のお姉さんさ」
「オレには猫の母親など居ない」
「オレはこの寺のお姉さんに育てて貰ったのさ、
オレを産んだ奴は早くにオレを捨てたのさ」
「だからオレは猫なんかじゃない、人間なのさ」

KINGはハッキリとした口調でその問い合わせに答えた。

老婆猫はそれを聞いて、静かに話を続けた。
「私はこんな話を聞いた事があるよ、
むかし体の弱い子供が生まれ、
母親は一生懸命育てようとしたが、
その子はおチチも吸わなかつた」
「このままだと間違い無く、この子は死んでしまう」
「愛する我が子を死なせたくは無い」
「考え、何度も悩みながら、
母親は人間にその子を託す事にした」
「人間は自分たちには無い
「チカラ」を持っていると聞いた事が有ったからね」
「母親はその「チカラ」に賭けたそうさ」

KINGは黙ってその話を聞いていた。

更に老婆は続けた

「でもね、その母親は一生『その子』の事が気に掛かり死んでもなお、
子供を自分の手で育てる事が出来なかつたこと
手放してしまつた罪を背負い、苦しんだとの事さ」

「お兄さん、あなたも母さんが憎くて仕方ないかい？」

KINGは唯黙って老婆を見ていた

老婆は優しい眼差しでKINGを見つめ、
静かに頭を下げて裏山へと消えて行った。

姿が全く見えなく成ったその時、
老婆の去ったその裏山から

「KING！愛しているよ、
よく生きててくれたね！ありがとう」
驚くほどハッキリとKINGの耳にその声は届いた。

「え？何だ？どうした？」
「何でオレの名前を知ってる？」
疑問の数々が頭の中をグルグルと回った。

KINGはハッとした

「オレの母親？」

「すると、さっきの話しさはオレのこと？」

次から次に色々な思いが頭の中を走り回る。

頭の中が爆発しそうに成ったその時、
「何か」が心の中で語りかけた。

「あれ？ この感覚、何か覚えがある、そうだ！
初めてミルクを口に含もうとしたあの時、
からだ全体が光に包まれたような」
KINGはその思いに任せ、そっと耳を傾けた。

その「何か」がKINGに告げた
「KING、あのひとはあなたのお母さんよ」
「死んでもまだ、
あなたのことが忘れられずここに来たのよ」
「KING、きっとあのひとは苦しみ続け、
その苦しみであの様な姿に成ったのよ」
「KING、あなたが母親のことを恨むことは仕方がない」
「でも、その思いが消えない限り、
あなたのお母さんは罪を背負い、
あの姿のまま迷い続けるのよ」

KINGの目に大きな涙が溢れていた。
本当に自分はお母さんを恨んでいたのか？
口では罵りながらも
どこかでその面影を探していたのでは無いのか？

KINGは素直な気持ちを言葉にした。
「お母さん、違うんだ。ボクは自分自身が許せなかった」
「片目で歪んだ背中で生まれて来た自分を恨んでいた」
「こんな姿で無ければ、お母さんを悲しませなかつた。
ボクはお母さんが本当に好きなんだ」

「何か」がまたKINGに語りかけた。

「KING、あなたに必要なのは何なの？」「恨み辛み」
「それとも、」
KINGは「何か」の言葉を遮り、
ハッキリと自分の言葉で叫んだ！

「お母さん！大好きだよ！
お母さん！罪など背負わないで！」
「ボクは生きるって決めたんだ！」
「お母さんのお陰でボクは今ここにいる」
「お母さん！産んでくれてありがとう」

その時だった。
あの薄汚れた老婆の姿が光輝き、
とても綺麗な母親猫の姿に変わるのが見えた。

「KING、ありがとう、私の愛する可愛い子」
「あなたの言葉で、私は救われました」

「これからは迷いの世界では無く、
光の世界からあなたを見守っているわ」

KINGがふと我に帰ると、そこには、
いつもの観音さまが、優しい笑顔で見つめておられた。

「なあキーちゃんよ。
このお寺では、不思議なことばかり起こるじゃろ？」

キーちゃんはKING翁の話を聞いて、
もう涙と鼻水でぐちゃぐちゃだった。

「KINGさん(いつもはKINGじい様と言っている)の
お話し凄すぎてボクもうダメだわ」

「KINGさんの人生と比べるとボクの人生なんて...」

するとKINGはキーちゃんに諭す様に言った。

「キーちゃん、よくお聞き」
「人生は比べる様なもんじゃ無い」
「比べてもそこには答えなど無い」
「必要なのは『自分の人生』にどう向き合い、
どう取り組んだかだ」
「なのに人は直ぐ、自分と他人を比べたがる」
「比べて喜怒哀樂し、無駄な時間を過ごしている」

「ワシは生まれつき目がひとつ無い、

けれどもその見えない目が

見えないものを見てくれた」

「キーちゃん、

お前のそのカギしっぽもお前だけの宝ものなんじゃ」

「キーちゃん、『魂を磨く』って言うだろう？」

「『魂』とは自分自身のことなんだよ」

「『魂』は常にカタチを変えている、

怒りや悲しみや妬みは『魂』をトゲトゲしくする」

「『魂』を丸く綺麗に仕上げるのには『愛』『感謝』

『思い遣り』『優しさ』

など色々なものが必要なんだよ」

「それらひとつひとつは『人生』において

自分で手にするものなんだ」

キーちゃんはKINGの一言一言を噛み締めて聞いている。

そして、KINGは最後にこう言った。

「ところでキーちゃん、

ワシの心の中に語りかける、

あの『何か』は何だと思う？」

「ボクはね『観音さま』だと思って聞いていた」

「そうか、そう思ったんだね」

「何なの？KINGさん教えて」

「実はね、キーちゃん、この私にもわからんのじゃよ」
「キーちゃんが言う様に『観音さま』かも知れないけど、
ワシにとって名前や何ものであるかは必要ないんじゃ」

「『何か』がいつもワシの中に居てくれている、
それだけで充分じゃよ」

KINGはそう言って、ゆっくりと観音さまに手を合わせた。
観音さまのその足下には
何故か「心」の一文字が書かれていた。

観音さまはいつもの優しい微笑みで
いつまでも二人を見守っていた。

お寺の山には清々しい風が今日も吹いている。



キーちゃんの大冒険 「番外編2 ゆめの朝」

キーちゃんとゆめは同じ部屋で寝ています。

ゆめは2年前に体調を壊し、それから寝る場所をお姉さんが変えてくれたのです。

実はゆめはエアコン完備のお部屋で寝ています。
今年の夏も猛暑が続き、
2年前に熱中症を患ったゆめにとっては
この部屋は極楽の他何でもないのです。

ゆめも随分と年老いて来ましたが、
気持ちはまだまだ女子校生のまま
「かわいい」「キレイ」と言われると
照れながらも笑顔が溢れます。

そんな乙女心のゆめ殿、今日も1日
お寺のアイドルとしての業務も終わり、
疲れきって寝ていた次の朝、

「えー！ ゆめちゃん何これ！」
「どうしたの？」と言うお姉さんの驚きの声で
目が覚めたゆめでした。

寝ぼけ眼で周りを見てみると、
ゆめの寝ていた部屋はゴミだらけ。

ゴミ袋は細かく噛み碎かれ、
中のゴミは部屋一面入り口のドアまで広がっています。

お姉さんは
「もう、ゆめったら、どうしたの？ ストレスなの？
大丈夫？」とゆめの事を心配しつつ
文句も言わずに清掃してくれました。

でも、ゴミを夜中に散りばめた記憶は
ゆめには全く有りません。

不思議に思いながら、ゆめはいつもの様に先ずは園内へと
向かいました。

不思議な朝を迎えた1日も無事に終わり、
その日もゆめはグッスリと寝ていました。

すると、深夜になったころガサガサという音で
ゆめは目を覚ましてしまいました。

「誰？ キーちゃん？」
どうもキーちゃんでは有りません、
キーちゃんは力ギの掛かった自分のゲージで
グッスリ寝ています。

ゆめはその音がする方へと静かに近づきました。

「おっ！ 気が付いたかい？ ゆめ殿」
それは、いつもキーちゃんが気に入って遊んでいる
ハリネズミのぬいぐるみだったのです。

ゆめは
「え？ なんで？ 動けるの？」とハリネズミに言うと

ハリネズミは
「驚くことじゃない、ぬいぐるみと言えども
心あれば動けるんだよ」と当たり前の様に答えました。
「オイラの名前は『ジャック』よろしくね！」

「ねえジャック、いつから動ける様になったの？」と
ゆめは不思議そうに尋ねました。

「ゆめ殿、実はオイラにも良く分からんのです」
「気がついたら動けました」と同じく不思議そうに
答えるジャックでした。

ゆめはしばらく考えてハツ!!としました。
ハリネズミのジャックはキーちゃんがお寺に来る前から
居たのですが、
キーちゃんが見つけ
大のお気に入りの友だちになったのです。

ハリネズミのジャックはキーちゃんの相棒として、
鬼ごっこやままごとをしてます。

ゆめはジャックに言いました
「ジャックはキーちゃんの大の仲良しだよね」
「いつも一緒にあそんでるよね！」

ジャックはちょっと不機嫌そうに答えました
「遊んでる？」
「キーとオイラが仲良し？」
「キーはオイラを手で弾いて、そして走ってきて捕まえて
そしてまた手で弾き飛ばされる」
「キーはいつもオイラのお腹噛むんだぜ！」
「そしてオイラの顔はキーのヨダレでいつもベトベト」

ゆめはクスクス笑いながらその話を聞いていました。
「だからジャック、それ鬼ごっこだよ」
「お腹噛んでるんじゃ無くって、『お腹空いてない？』って
言ってるんだよ」
「それに顔を舐めてるのは愛情のしるし」
「おままごとしてるのよ、ジャックと」

ジャックは言った
「え？ そうなの？」
「キーちゃんには嫌われてると思ってた」
「だから、ムシャクシャして夜中にゴミ箱のゴミを
散らけたり、ゴミ袋を粉々にしたんだ！」

「そうだったのね、ジャックのお陰で
私がやったんだとお姉さん思ってるわ」
「イヤだわジャックたら」とゆめは笑いながらも注意した。

そしてゆめはジャックに
「きっとキーちゃんの思いが通じて、
　ジャックに心が生まれたのよ」
「ジャックはキーちゃんと心で繋がったのよ」
「キーちゃんきっと喜ぶわよ！」
「教えてあげなきゃ」とワクワクしながら言った。

でもジャックは静かに落ち着いて言った。
「ゆめ殿それはやめておく」
「オイラはぬいぐるみだよ」
「今は遊んで貰ってても、
　キーちゃんが大人になれば忘れられるよ」
「いや、忘れなければダメさ」
「また新しいお友だちも作らないと」
「オイラはぬいぐるみ、
　ぬいぐるみとしてキーちゃんに接するよ」
「ゆめ殿、ゆめ殿には感謝するよ、
　だってキーちゃんの思いをオイラに教えてくれたから」
「そうか、オイラ、キーちゃんに愛されてるのかあ」
「そうか、友だちなんだ」とジャックは
キラキラとした目で言いました。

夜が明けて朝がきました。

「そろそろお姉さんがお寺に来る時間だ」
「みんなも起き出すよ、ジャック大丈夫？」
何事もなかった様にジャックはぬいぐるみに戻ってました。

さあ、ゆめの朝が始まります。

ゆめはお姉さんが朝ご飯を作ってくれている時間を利用して、お寺の中を巡回します。

ゆめは毎朝同じコースで、雨の日でも雪の日でも一日も休んだことは無いのです。

熱中症を患ってた時も身体に負担をかけないように何回かに分けて巡回してくれました。

なぜかと言うと、ゆめはひとつひとつのお墓、そして共同墓地、もちろん合同で埋葬されている供養塔お寺に眠る魂全員に朝の挨拶をしているのです。

ゆめが「みんな朝だよ、おはよう、今日もよろしくね」と声をかけると、

「今日は私のお家の人たちが会いに来るの」とゆめに教えてくれる。

「今日はウサギのマックちゃん、犬のグロース君
猫のチップちゃんとポップくんのご家族ね！」

「わかったわ 大丈夫よ！

『みんながとても喜んでいる』ってちゃんと伝えてお迎えするから、みんな安心してね」

「ありがとう！ ゆめ殿！ 私達の代わりにいつもゆめ殿が笑顔でお迎えしてくれるから感謝してるよ」

そうなのです、ゆめは、ちゃんとどこのご家族がお参りされるかを朝に聞いて、その子たちに代わって「ありがとう待ってたよ、来てくれてとても嬉しい！」をひと家族ひと家族、笑顔で喜びいっぱいでお迎えし伝えてくれているのです。

そんなある日の事でした。
いつもの様にご家族に挨拶していると、
女の子がクマのぬいぐるみを大事に抱いているのに気づきました。

ゆめはそのぬいぐるみを見ながら、
ハリネズミのジャックのことを思い出しました。

「あの子のクマさんも、実は心を持っているのかしら？」
ゆめは余りにも女の子が
愛情をクマさんに注いでいるのを見ていて
何となくそう感じました。

ゆめにじっと見つめられてるクマさん
ゆめの方を向いて、ゆめにだけわかるように
ウインクをしてニッコリ笑いました。

ゆめは「やっぱりね」「わかってたよ」と心の中で
クマさんに言いました。

ゆめは知りました。
大切な物には「心が宿る」
それが「ぬいぐるみ」や例えば「クルマ」であっても
大切な思いはちゃんと通じている。

だから、お姉さんは毎日毎日丁寧にお墓を掃除して、
たとえ返事が無くとも、この子たちが気持ちよく暮らせる
そんなお寺にしてくれている。

お参りに来られた人たちが、この子たちに会って
心が落ち着く様に、ゆめは笑顔でお出迎えする

みんなが「幸せに過ごせる様に」ゆめは今日も
お寺の中を元気に走っている。

ゆめはみんなに挨拶

ゆめはみんなに感謝

新しい朝、昨日とは違う今日、明日に繋げる素敵な今日

ゆめはそんな『朝』が大好き

お寺の中で眠る子たち、みんなが言う
「ゆめ殿、ゆめ殿の朝はいつも素敵ダネ！」
「ゆめ殿、いつもありがとう！」



ゆめちゃんいつまでも元気でね



千寿院公式ライン
お友だち登録
宜しくお願い致します



ハリネズミのジャック
キーチャンのお気に入り



これからも
千寿院
たかつき動物霊園
何卒宜しくお願いします

